



©Dieter Nagl

ところどころポツカリと穴が空いたように音楽が抜けていて、フィナーレも、ヨーロッパ人の奴隷3人が後宮から逃亡しようとして捕まり、「お慈悲を！」と太守に懇願する四重唱で終わってしまっているのだ。

その空白を埋めるために起用したナレーターが、チューリヒの《偽の女庭師》を演出しているチロル人のトビアス・モレットイだ。警察犬を使った刑事もののTVシリーズによって国民的スターであり、ザルツブルク音楽祭の《イエーターマン》やブルク劇場に出演。今回の《ツァイター》のテキスト構成は自分で行っているから、時事ネタが飛び出し、昨今の中近東情勢とのからみで気になる箇所も。歌手は美女ツァイター役に「夜の女王」として目下最強のディアナ・ダムラウ、恋人ゴマツにモーツァルト・テノールの第一人者、ミヒヤエル・シャヤード。他にルドルフ・シャシング（スルタン・ソリマン）、フロリアン・ベツシュ（アラタイム、シュトゥットガルト《魔笛》のパパゲーノ）、アントン・シャリナー（オスミン）とほぼ理想的な陣容だ。モーツァルトの作品を、未完であっても、鑑賞に堪えるようなかたちに整え、世に出そうと尽力するアーノンクールの努力が報われている。

アーノンクールと私④ イザベル・レイ Isabel Rey ●ノンノン 指揮をすると目が輝いてきて、ちよつとでもミスをするとき、ギョロつと目をむいてこちらを見るところがまた楽しいのです

取材文 中東生
Text=Shinobu Nukua

んでいる人です」

特に彼のモーツァルトが特別だと続けた。

「アーノンクール以前のモーツァルトは、私にとって情熱に欠け、冷たく聞こえます。彼はモーツァルトの音楽に、情熱を与えた偉大な人物です。技術的に正確な音楽の下に、ブッチーニのような熱さが流れているのです。私にとって、モーツァルトのスペシャリストとしてのマエストロ・アーノンクールと、スペイン・ギターのスペシャリスト、鈴木一郎先生に対する尊敬の念はとも似ていて、一緒に音楽ができることを感謝しています」

アーノンクールらしいエピソードとしてこんな話も聞かせてくれた。「前日の練習での」

先月レポートした《偽の女庭師》では、アーノンクールのすずめで今回初めて、サンドリーナではなくアルミンダを歌い、大成功を飾ったイザベル・レイ。最近重くなりつつある彼女の声とアルミンダの情熱的な表現とがピタッと合まり、美しい舞台姿と相まって、これ以上の適役はいないように思われた。

メ出しが書かれた紙を、楽屋まで持って来てくれるほど常に鍛錬の人ですが、彼との仕事はとても楽しいです。例えば、私がフレーズに適切なリズムを与えられなかった時、「大好きなおじいさんのソファで跳ねているように」と言われ、すぐにできたことがありました。いつもそのような、適切だけれど意表をついた、まるで冗談のような例えが飛び出すので、皆笑い出すのですが、彼は真剣そのもので、私たちが笑うとキョトンとし、それがまた笑いを生むのです。人生の中で音楽に一番情熱を注いでいるように、指揮をすると目が輝いてきます。そして、ちよつとでもミスをすると、ギョロつと目をむいてこちらを見るところがまた、楽しいのです」

イザベル・レイ

